

さくらびと

北に帰った人たちが残していったもの

細川呉港（会員）

30年ぶりに函館のいとこに逢いに行っ

た。85歳の女性である。今は引退しているが、大きな病院の総婦長を長年勤めてきたので歳をとってもしっかりしている。若いとき、といってもまだ未成年のとき、看護婦見習いとして満洲の本溪湖の病院に行き、終戦のとき病院ごと八路军に接収され、軍とともに満洲を点々と。蒋介石軍に追われて鴨緑江を越え、朝鮮に逃げたこともある。朝鮮に入れば、蒋介石軍は入ってこないから安心だといわれたという。紅軍に接収された病院は、病院長も医者も、そして彼女のような未成年の看護見習いも、みんな同一賃金をくれたので、これでは「不平等」ということで、日本人だけ集まって給料を全員から回収し、それなりの役柄に応じて再配分

したという。

30年前にその彼女の父親、つまり私にとっては母方の伯父の葬式に行って以来の再会である。伯父、つまり母に兄がいるというのを知ったのは、私がもう成人してからだった。それまではまったく知らなかったのである。母にしても、60歳を過ぎて、隠していた今までの過去を、子どもたちに話し、また自分自身も高齢の「兄」と交流をしなければ、と思ったのであろう。

過去を隠していた理由はこうだ。母の母が、その昔、後妻に入ったのである。そのあとに生れたのが、母の姉妹だった。だが生き別れの先妻の子が、それも男の子が2人いた。その男の子にとっては、祖母はいわば継母になる。なぜ先妻が、

子どもを置いて帰ったのか、そのころどのような生活をしていたのか、分からない。

残された2人の男の子は、継母の元で育った。いや育っていたのだが、すぐに家を飛び出した。おそらく未成年のときであろう。そのころは16、17歳で丁稚奉公に出されるのがあたりまえの時代ではあったが、兄は東京の鉄工所の職見習いに、弟もそのあとを追って東京に出た。家出同然だったろう。兄はその後北海道に渡ったという。2人とも、よほど継母のもとで居心地が悪かったらしい。気の強い祖母であった。それに腹違いの、つまり私の母の姉妹が次々に生れた。

とにかくそのころの状況は詳しいことは分からない。その北海道の、明治32年生れの伯父というのが、30年前に亡くな

り、その葬式に来たのが、私が函館に来た最後だった。その伯父の娘、今は85歳の娘が私にとっていとこであった。イカ釣り舟の入る港の家から、山の手の湯川の温泉に近い、そしてトラピスチヌ修道院にも近い、住宅街に新しい家を建てていた。庭も広い。

亡くなった伯父についても、詳しいことは分からない。家出して東京に来た弟を、自分の勤める鉄工所に入れておいてから、自分はひとり北海道に渡ったという。いい仕事があったら、弟を呼び寄せるつもりだったらしいが、ついに実現しなかった。大正の初めはまだ北海道も開拓の時代で、多くの人が一攫千金をものろんで北海道に渡ったという。伯父もそのひとりだったのだろう。

生前に一度だけ私が直接伯父から聞いた話では、何でも小樽から船に乗って、カムチャッカに渡り、ソ連の蟹の缶詰工場で働いたこともあるという。獲れた蟹をできるだけ早く缶詰にするために、シーズンになると人手はいくらあっても足りないくらいだったから、現地ではいつでもすぐに雇ってくれたとも。そのころはパスポートとかビザとか、そんなものはなかったから、好きなときに船に乗って

ロシアに行けたらしい。私はカムチャッカの工場で、伯父がロシア人に混じって、蟹をさばいている光景を想像した。

これも母の生きている時代に聞いた話だけれど、伯父が北海道に渡ったのは炭鉱で働くためだったという。九州の筑豊炭田に少し遅れて、北海道でも石炭は黒いダイヤといわれ、明治以降の日本の産業革命の推進力だった。西日本では「遠賀川沿いの煙突（つまり炭坑）」を指していけば、すぐに雇ってくれ、毎日銀シャリが食える」といわれたように、北海道でも各地で石炭が掘られた。なかでも、空知、夕張の石狩炭田は埋蔵量が日本一といわれた。時給がよかったか、あるいは目先の給料が高かったのか、伯父は宣伝文句につられて北海道に渡った。

ところが、それが罠だった。いったん炭坑の宿舎の「たこ部屋」に入ると、厳しい重労働が待っていて、やめようにもやめれない。しかも逃げようにも監視がついていた。遊廊と同じで、支度金とか北海道までの旅費とかいろいろな前借り、契約をタテに、何年間かは「たこ部屋」から抜け出せないのだ。

母からの間接的な話だから、どの炭鉱か、どこまで本当の話か詳細は分からない。今となっては確かめようもないの

だ。しかし「たこ部屋」の話は若い私にとって強烈だった。多くの若者が、甘い言葉につられて、北海道の炭鉱に出稼ぎに行ったのだろう。

とにかく、無一文で北海道に渡った伯父は、その後、いろいろな仕事を転々とし、晩年、私が逢ったときは、タイル貼りの職人であった。少し昔は、風呂場や流しがタイル貼りで、これを貼るには特殊な技術がいり、日当もかなりいいと聞いていた。娘の建てた新築の家の風呂場は、特別に彼がタイルを貼ったという。とにかく伯父は波乱の人生を送っている。

朝食前、いとこの家から、朝の散歩に出た。住宅街といっても緑が多く、春とはいえまだ肌寒かった。もともと、街路樹や、よその家の庭の木や花を見て歩くのが好きで、知らない町のしかも日ごろはなじみのない北海道の草木である。本土ではお目にかからないような直径1メートル以上の大きな針葉樹が何本も生えている庭もある。立ち枯れて木肌のない木の空（うろ）から、桜の木が生えていて、それが枝を一杯広げてちょうど花が満開であった。桜はよく空から生えることがあるが、土台の木も大きく、また咲いた桜も見事だった。桜が生えている空が、



枯れた大樹の空（ウロ）に生えた桜の木

すでに4メートルも上にあり、そこから桜が生えているので、高くて何という桜か分からない。まるで巨大なオブジェか、前衛の生け花のように見える。さすが北海道はスケールが違うと思った。

10分ほど北に向かうと、公園があった。「見晴公園」と書いて「みはらし」と読む。住宅街にある公園と思って何気なく入ったが、かなり大きかった。入るにしたがって、どんどん奥が深くなる。杉や、ヒノキ、楓の林がある。赤松もある。大きな池があってその傍らに書院造りの茅葺きの古風な邸宅。少し離れたところに洋風の古い大きな温室もあった。あとで分かったことだが、なんと4万坪以上あるということだった。これは並の公園ではない。これも後に聞いた話だが、この公園は「香雪園」と言って、もとは函館の豪商、

岩船屋という呉服商の別荘だったのだそう。それにしても広い別荘である。

話が横道にそれるのを承知であえて説明すると、この別荘のもとを作ったのは、新潟出身のヤスという女性。江戸時代の文政15年（1818年）の生れだという。一度は結婚したが亭主が大酒飲みで離婚。ヤスは父親をはじめ一家を連れて函館に来る。心機一転、新天地を求めたのである。

最初は駄菓子子の行商から始めたが、父親が死亡。伝聞によるとその父親の遺骨を持って、ヤスは高野山に行ったのだという。本当かどうか分からないが、そこで上方の親切な呉服屋と知り合い、綿の下着や、呉服の商売を函館でするように勧められた。援助も受けたかもしれない。おそらく上方で仕入れた反物や呉服を、北前船で小浜か敦賀から函館に運んだのであろう。

ヤスは誠意を持って商売に励み、店は次第に大きくなり北海道の各地に販売するようになったという。のれんは2代目岩船峰次郎、3代目峰次郎と受け継がれ、函館では押しも押されぬ豪商になった。岩船という名字は、ヤスが新潟の岩船郡出身だったから。岩船屋は明治35年から

別荘のあった「香雪園」の造園に取りかかり、2代目、3代目を通じて、たくさん木を植え、池をつくり、大きな庭石を入れたという。

しかし、岩船屋は、単なる豪商ではなく、ヤスの時代から貧しい人たちにも目を向け、常に庶民の側に立って数々の慈善事業もやっていたから、庭園も早くから一般に開放した。自分も赤貧を洗うような生活の中から立ち上がったからだ。今では函館市の庭園として古風な別荘とともに「名勝」、国の文化財にも指定されている。

広い庭園である。朝早いから誰もいない。私は杉やオシコの木を縫うように歩いたが、ふと気がつくと、足元の小道から少し離れたところに、小さな石碑があ



函館見晴公園の「日朝友好の桜」碑

るのを発見した。注意しないと気がつかないほどの灰色の自然石の石碑である。近づいて、しゃがんで読むと、「日朝友好の桜」と書いてある。昭和44年、函館市が建立している。

「日朝」？と私は考えた。日韓ではない。とするとこれは北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国に関係のある石碑ではないか。しかも「桜」とあるのも意味が分からない。

そこで私は、園内の案内所を尋ねた。「緑のセンター」といい、研修室や図書館、休憩室やホールもある立派な建物である。学芸員というか緑化普及担当の女性（中者徳子さん）に聞くと、意外なことが分かった。

今から57年前、昭和34年（1959年）に函館近辺にいた朝鮮の人たちが祖国「北朝鮮」に集団で帰ったのである。そのときに彼らが記念にと、桜を千本、この香雪園に植えて行ったのだという。

私はびっくりした。石碑は、桜植樹の記念に、函館市が、木を植えてから10年後にこの「日朝友好の桜」の碑を建てたのだという。「革新」の市長だったと。植えてから10年もたち、そのころおそろく桜が大きく育って見事な花を咲かせていたのだらう。

今ではあまり話題にもならないし、若い人たちは知らない人が多いと思うが、戦後1960年代に、日本にいた多くの朝鮮の人たちが祖国に帰るといふ運動が起こった。戦前に朝鮮から日本に来た人たちは、戦後朝鮮がふたつの国に別れたためにどちらに帰るかが問題であった。南北分断である。北は社会主義国、南は自由主義体制であった。

運動は、北朝鮮に帰る「北朝鮮帰還運動」である。南の韓国政府は当然のことながら、日本にいる朝鮮人が北に帰ることに反対した。在日の朝鮮の人たちは南から来た人も多かったからである。

しかし、1959年の12月14日、新潟港からの第1陣を皮切りに、多くの朝鮮人が集団で北朝鮮に帰った。その後84年まで帰還運動は断続的に続き、全部で、9万3000人以上。その中には、朝鮮の人と結婚した日本人妻や子どもたち、つまり日本の国籍を持った人も7000人近くいた。戦前に南朝鮮（韓国）から来ている人も多く、また親や兄弟は北にいる人も。朝鮮動乱で、戦乱を避け、北から南に移動した人も多かった。

もともと戦前から日本には多くの朝鮮の人たちが来ていた。中には私の伯父のように、「いい仕事があるとか」「給料が

いい」という甘言にノセられて、やってきた人も多い。もちろん、戦前は日本と朝鮮は一体だったから、自主的に出稼ぎに来た人もいる。戦後は、終戦から3年後、1948年に起こった犠牲者6万人とも言われる済州島民虐殺事件、1950年に勃発した朝鮮戦争の逃避者もいる。

いずれにしても、多くの朝鮮の人たちが戦後の日本にはいた。その人たちが「祖国北朝鮮」に帰ったのだ。この問題に韓国は一貫して反対し、日本にいる工作員や、あるいは韓国から潜入した工作員が帰還の妨害工作まで行なった。その1つが新潟帰還事務所の爆破である。在日朝鮮人が、韓国ではなく、社会主義の朝鮮民主主義人民共和国に帰るのは、政治的にも韓国にとっては大きなマイナスになるからであった。その韓国もまだ貧しかった。私も昭和46年（1971年）に韓国をひとりで回ったが、韓国は朝鮮動乱のあとまだ復興できないでいた。小さな子どもが街頭でたばこを1本、2本とバラで売っていたし、貧しい人たちが多かった。

北朝鮮への帰還運動は、当時は日本の多くの新聞社も、とくに「知識人」はこの問題に対しては一貫して北朝鮮に帰ることに「賛成」だった。多くの学者や歴

史家さえも、社会主義に対して理想郷を夢見ていたからである。

北朝鮮の日本での司令部である朝鮮総連は、北朝鮮は「地上の楽園」であると宣伝した。日本の新聞にもこの文字は踊った。このころ出版された、寺尾五郎の『38度線の北』は北朝鮮讃歌の典型的な本である。

私が覚えているのは、ずっとあとだが中国で文化大革命が吹き荒れていたころ、北京にひとりだけ「追放」されないで残っていた朝日新聞の秋岡家栄特派員が、人民日報の報じる記事を連日1面で転載し、結果的には「文革讃美」を繰り返したことである。しかも北京から平壤に飛び、わずか3、4日滞在して、当局の話を聞いただけで（そのころは北京特派員が北朝鮮もカバーしていた）新聞の全頁で「発展する北朝鮮の農業、工業」というタイトルでトラクターなどの写真を載せ、大特集を組んだことである。北朝鮮は「理想」の社会主義国家であった。秋岡家栄はその時の「功績」により、その後日本における人民日報の総代理人となっている。

その「地上の楽園」である祖国に帰った人たちが、実はそうではなく、かなり困窮な生活を余儀なくされている、言論

の自由がない。それにどこに行ったか分からなくなった人も多い——、ということがさやかれるようになったのは、ずっとあとである。亜紀書房という、社長が私と同郷の小さな出版社が出した『凍土の共和国』などは北の実態を告発した数少ない本の1冊である。

当時函館近辺にいた朝鮮の人たちは4000人いたという。そのうち何人が北朝鮮に帰ったか知らない。しかし、その人たちが日本を去るにあたり、なんと桜を見晴公園に千本植えて行ったというのだ。彼らは決して日本に対していい印象を持っていた人たちばかりではなからう。つらい思いの方が多かったのではないか。それは、「たこ部屋」に詰め込まれていたたり、あるいはカムチャッカまで出稼ぎに行った私の伯父だけではなかったろう。とくに戦争末期の、2、3年間は多くの日本人も塗炭の苦しみを味わったし、まして朝鮮の人たちにおいてはである。記録によると、この時植えられた桜は、ソメイヨシノ、普賢象、関山（かんざん）ほか——、となっている。北海道に自生の大山桜をのぞいてはおそらく里桜、いわゆる園芸種が多かったと思われる。私は最初、なぜ桜なのか疑問に思った。朝

鮮の人たちなら「木槿（むくげ）」が最初に頭に浮かんだからである。朝鮮の人たちが自分たちがここにいたあかしに、自分たちの「国の花」である木槿を植えて帰るのがごく普通のことではないかと思われた。それをあえて日本人の好きな桜にした——。

私が子どものころ、田舎の近所の家に紫の花の咲く木槿の木が1本あった。夏になるとたくさん花を一齐に咲かせる。そして暑い夏の間中、毎日次々に咲き続けるのだ。母がいつも「きれいなねー」と言っていた。そういった花のある家がうらやましくもあった。今東京のわが家にはこの紫の木槿が満開である。

夏に咲く花は、百日紅（さるすべり）くらいしかないから、木槿はとても貴重である。百日紅にも白、赤、ピンク、そして紫もあっていろいろだが、群がって咲く百日紅は、やはりなんとなく余計、夏が「暑い」気がする。余談であるが、夏の暑いときに、観光客の多い「広島」の平和大通りには、この百日紅の花が街路樹としてたくさん植えてある。「八月の広島」だからである。

脱線ついでに、百日紅について話すと、私はアメリカで不思議な体験がある。1984年にルイジアナ州ニューオーリン

ズに行ったことがある。ジャズで有名な町だが、もともとはフランスの植民地で、カソリックが多い。その町の中にある、白い教会（セントルイス大聖堂ではない）の周囲の広場がまるで芝生のような紫の花で埋められていた。何だろうと思って近づいて見たが分からない。しゃがんでみると、なんとそれが百日紅だった。高さ10センチほどの百日紅が、まるで芝生のようにぎっしりと植えられているのだ。私は驚いた。百日紅の木がこのように植えられているのを見たのは初めてだった。なるほどこのようにすると芝生のように見えるのかと。日本では、その白い斑点のある茶色の幹も鑑賞するということで、日本庭園には必ず植えられている百日紅である。所変われば、まったく違う植物のように見えるのも不思議だった。しかも背景は白い教会である。

不思議だったのは、その白い教会の四隅に巨大な樹が4本植わっていたことである。これがなんと泰山木（たいさんぼく）だった。ご承知のように、泰山木は中国でも古くから格調のある品のいい木として大切にされている。白い花びらの大きなマグノリアである。この木で有名なのは上海の魯迅公園である。私の田舎の庭にもあったからよく知っている。6

月になると大きな白い花が次々に咲いていた。そのもっとも東洋的な木だと思っていた泰山木が、なんと教会のシンボルとして植えられているのだ。百日紅といい、泰山木といい、場所によってはまったくイメージが変わるものだと思い知らされた。樹にもそれぞれ「人格」があるが、まるでその人格が変わったようだった。

話をもとに戻そう。

桜は向日性の木である。日が当たらないと成長しない。それに園芸種だと余計、病気や害虫、風雪にも弱いのである。寿命も長くないと思われる。そのためか、「日朝友好の桜」の碑のまわりに桜を捜して歩いたが、40年たつというのにあまり木が残っていないのである。あっても細い、枝の少ない今にも倒れそうな木ばかりであった。「千本の桜」の面影はほとんどないといっている。おそらく周囲の針葉樹、常緑樹の成長に押されて、木の勢いが衰えたのであろう。北朝鮮に帰った人たちが、どのような思いで、自分たちのいた函館に「桜」を千本、残して行ったのかその思いは計るべくもないが、いずれにしてもわずかばかりの木しか残っていないのである。この公園に来る多くの人も小さな石碑には気がつかないだろう。

その千本の桜の名残を、接ぎ木して、あるいは芽を継いで、残そうとしている人がいることを、前述の緑のセンターの中者徳子さんが教えてくれた。北海道新聞の切り抜きまである。それによると、函館では有名な「桜守」の浅利政俊先生（もと小学校教師）が、自分の家のオオシマザクラの台木に見晴公園の友好の桜の芽や枝を継いで、育てているというのである。そのうちの1本、普賢象を、2001年に新たに見晴公園に植えた。1959年に朝鮮の人たちが植えて行った千本の桜は、今では百本ほどがかるうじて残っているとも。浅利先生はその人たちの思いを、後世につなぐと思ったのだ。このままはおいておくといずれ消滅してしまう。

「40年前に函館を後にした人たちが、あるいはその2世、3世でもいい。いつの日かここに帰ってきて、この桜を見てほしい。そういう日が来ることを願っている」と浅利先生。半年後、函館の北、生れ故郷の七飯町に先生を訪ねた私に、先生はそうおっしゃった。浅利先生は、小学校の先生をしながら、桜の品種を100種類以上作り出した人で、「桜守」として有名。松前城の桜を保護育成した。

昭和6年（1931年）生れ、浅利政俊85歳。彼がなぜ、帰国した朝鮮の人たちに、思いを寄せるのかというと、それには理由があった。

浅利先生が12歳のとき、昭和18年のことである。近所の素封家の家に、竹本和夫という青年が居候をしていた。実は竹本というのは日本名で、本当は朝鮮人であった。それだけなら珍しいことではない。函館ではあちこちに朝鮮人労働者がいたからである。上磯（現北斗市）の太平洋セメント工場の作業員として、そのセメントの原材料をとる義朗鉾山の石灰石の採掘と運搬作業に、また戦前の青函連絡船の栈橋であった有川栈橋では荷物の陸揚げ、積み出し、また函館ドックで働いていた人たちが、あちこちに朝鮮の人たちは大勢いたからである。

素封家Sの家はかつて村会議員までやった家だが、息子を兵隊にとられて、働き手がいなくて困っていた。それで竹本青年に畑や田んぼの仕事、馬の世話を手伝ってもらっていたのである（当時日本中の町や村には、男の数が極端に少なかった。みな兵隊にとられていたからである）。

実はこの竹本青年は、空知の炭坑の

「たこ部屋」から逃げ出して来た労働者だった。つまり「追われる身」だったのである（当時石狩炭田は日本最大の炭坑で、北を空知炭田、南を夕張炭田といった）。

竹本青年が、どのようにして函館まで逃げて来たのか知らない。おそらく本土へ一番近い函館まで来て、身を隠してS家で働いていたのである。村の警察官が近くに来ると、彼はすぐに馬小屋の奥の2階の藁の中に潜って隠れていた。

当時12歳だった浅利先生は、兄といっしょによく竹本青年に遊んでもらったという。近所の川でも泳いだ。彼はすでに朝鮮で大学を出ていたとくさんの知識も持ち、いろいろなことを浅利兄弟に教えてくれた。朝鮮の歌も教えてもらった。アリランの歌も、日本語と朝鮮語の両方を教えてもらったのである。

ところがある日、戦争も押し迫った昭和19年か20年に、竹本青年はどうしても故郷の母親に会いたいから朝鮮に帰るといいだした。

津軽海峡を渡って新潟か、あるいは本州の下関まで行き、日本海や玄界灘を渡るというのである。まず竹本青年は貨物列車に隠れて乗り、青函連絡船で青森を目指した。貨物列車に隠れて乗るのに、浅利先生と兄が手引きをしたという。浅

利兄弟は途中まで見送りに行ったが、そのとき手を振って別れたのが生涯の別れとなった。竹本青年はその後どうなったか、消息は現在までまったく分からない。果たして朝鮮まで帰れたのか、青森までたどり着けたかどうか分からないままである。

それから73年、浅利先生も85歳になった。竹本青年は浅利先生より、10歳は年上であつたろう。なにしろあの時は終戦前のどさくさである。あるいは日本のどこかに、そのままいるのではないかと思ったりしたこともあったが、おそらくもう生きてはいまい――。

見晴公園に残る朝鮮の人たちが植えて帰った桜。その桜が今、そのすべてが枯れてなくなろうとしている。浅利先生は、多くの「北に帰った人たち」の植えた桜、夢を託した桜を、今1本1本、再生させようとしているのである。今でも、その人たちが北朝鮮のどこかで、日本を去るとき植えて行った桜のことを思い出しているだろうか。いつかは、その子どもがあるいは孫が、再びここに来て、この桜を見てほしい――。浅利先生はまた、戦後もずっと函館に残っているさまざまな朝鮮の人たちの「人生の聞き書き」を続けている。